

桂英澄

寂光

筑摩書房

桂英澄

寂光

筑摩書房

寂光

昭和四十七年四月十日 初版第一刷発行

定価 七〇〇円

著者 桂 英 澄

発行者 竹之内 静 雄

発行所 株式会社 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二の八
振替 東京 四 一一二三
電話 東京 二九二七六五一(代表)

印刷・三松堂印刷
製本・和田製本

© 1972 桂 英澄

(分類) 0093 (製品) 80077 (出版社) 4604

寂

光

第一章

一

青江慶一郎が万骨塔と名づけて故郷である山口県の長府に一字の塚を築こうと思いつたのは、明治九年、萩でおこった前原一誠の乱が鎮圧されて間もない頃である。九年のち、品川弥二郎などの強力な賛同者を得て、この塚は長府の西北にある功山寺の境内に実現した。

功山寺は文久三年の政変で京都を逃れて長州に落ちた七卿のうち三条実美らの五卿が一時ここに住み、また高杉晋作が諸隊を率いて兵を挙げ、維新発生の起点ともなった寺である。鎌倉時代以来の名刹であるが、青江家の菩提寺でもあった。

饅頭型に土を盛って頂上に三尺ほどの五輪の石塔を建てたいって無造作な墳墓に過ぎない。だが、背後に山をひかえてくろくろと樹木の生い茂った禅寺の一隅に、唐突に出現した土の色の真新しいその塚の荒涼とした感じには、慶一郎の抜きさしならぬ氣持が籠められていたとい

える。塚の表面には二百に余る小さな自然石が嵌めこまれていて、暗殺、刑死、割腹、戦死など、幕末維新の動乱の中で非命に倒れ無名のまま没していった同藩の武士たちの名が、そのひとつひとつに刻みつけられていた。

長府藩は、毛利輝元の甥でその養子となった秀元が、後輝元に実子が生まれたため家督を避けてこの地に隠居し自ら西の備えとなつてつくられた支藩である。萩本藩三十六万九千石に対して石高五万石に過ぎず、藩士の総数もそれだけ少いはずであった。にもかかわらず、幕末、維新に当たっては、この長府藩だけでも、下手人のわからぬ暗殺、腑に落ちかねる賜死割腹などの怪死事件が、十指に余るほど数えられる。それらは当事者によって意識的に闇から闇へ葬られ、あるいは歴史の方向が変わることによって動乱の底におのずから埋没していったものと思われる。いずれにしろ原因も動機もどこかはつきりしきらぬ曖昧模糊とした奇怪といつていような事件が多い。慶一郎はそうした事件のあるものと深いかわりをもっていたといえる。

慶一郎がこの塚を築こうと思ひたつたのは、むろんそうした旧藩士たちの霊を葬おうという供養の気持からでもあつたが、必ずしもそればかりではない。慶一郎の心にきざした万骨という思いを、おのれの生あるうちに形あるものに彫み残しておきたいという、一片の志からでもあつた。それはまたおのれの鎮魂のためであつたかも知れない。

その塚に名をとどめている藩士たちの多くの顔を、慶一郎はまざまざと覚えていたし、幾人かとは昵懇の間でもあった。とりわけ岩間勝之進の如きは、互いによく訪ね合つて、碁を打ち酒を汲みかわした仲である。彼と最後に会つてから、すでに十年の時を経ていたが昨日のことのように思える。勝之進の亡いままにして、慶一郎は彼とともに過ごした若い頃の動乱の日々のことをしきりに思う。そのたびに慶一郎の胸の奥底でさまざまな記憶が疼くようによみがえる。勝之進の非業の死は、やはり慶一郎にこの塚を築き塔を建てさせた大きな動機になっていたかも知れない。岩間勝之進は前原一誠の乱に加担して明治九年の暮に処刑された。その塚の前に立ち、自然石に小さく刻みこまれた勝之進の名を眼にするたびに、名状しがたい思いが彼の胸を去来するのである。

慶一郎の祖母は岩間家から青江家に嫁しており、勝之進と慶一郎は親類同士でもあった。たまたまともに若くして江戸に在った期間を同じくし、その間に往き来して親交を結ぶに至つたのである。

慶一郎は嘉永七年、十八歳の折りに、藩命で江戸在勤となつた父の勘右衛門に従つて、麻布日ヶ窪の藩邸に出仕した。

その前年、米国使節のペリーが軍艦を率いて浦賀に来航し、長府藩士も幕命を受けて萩本藩

の士卒とともに大森に出陣するという風に、世情は騒然としはじめていた。

慶一郎は幕臣下曾根金三郎の門を叩いて和蘭式砲術オランダを学んだ。かたわら、浪士岡田増六郎についても洋式砲術を修得した。また、蘭学者である伊東玄朴の象先堂に入って蘭学も学んでいる。さらに、築地鉄砲洲に新設された幕府講武場にもおもむいて、洋式銃陣の調練を見学したりしている。慶一郎も時代の波を彼なりにするどく受けとめ、洋学の新知識に眼覚めるものがあったからである。軍備や兵制を洋式に改革することの必要にも、長府藩内ではいち早く着目していたといえる。

同じ頃、慶一郎より一歳年下の勝之進も江戸藩邸にあったが、彼は斎藤弥九郎の門に入っていた。その道場である煉兵館には長州藩士が多く稽古に通っていたが、額の秀でた眼光のするどい勝之進も、まいにちひたむきに剣の修業に励んでいた。慶一郎と勝之進とは互いにおのれの道に打ちこみながらも、朝夕に行き来しては天下の形勢についてよく論じたものである。

翌年、慶一郎は藩庁に願ひ出て伊豆韭山の江川坦庵の門に入り、砲術、彈道学、鑄造術などを学んだ。だが、いくばくもなく坦庵の死にあつて長府に帰った。

帰国のち彼は、志ある同藩の士卒たちに和蘭式砲術オランダと洋式銃陣の指南をはじめている。しかし藩が正式にこれを取りあげ、慶一郎が長府藩の大砲教授方おおづつとなつたのはなお四年のちで

あった。

青江家は藩祖に従って長府に住んで以来、馬廻り二百石を禄し、慶一郎の父勘右衛門は目付役などを勤めたが、岩間家は代々萩宗藩の毛利に仕え、大組——馬廻りと同じ旗本階級を本藩ではこう称したのであるが——に入って家禄百五十石であった。

日本海に面した萩と、瀬戸内海側である長府と二十里ちかくを距てて住み、慶一郎と勝之進とは、ふだんそうたびたび会う機会があったわけではない。とりわけ、文久三年に馬関海峡で米国商船ペンブログ号を砲撃して攘夷の口火を切ってから、維新の大業の成るまでの五年間は、藩をめぐる内外の政情が二転三転して、長州藩は幾度か滅亡寸前という危機に晒されている。慶一郎も勝之進も他の多くの長州藩士と同様に文字通り東奔西走してあい継ぐ戦に明け暮れていた。にもかかわらず折りに触れて互いに音信を絶やさず、その後も生涯を通じてはるかに親密な気持を交わし合っていたといえる。直情径行の勝之進と、どちらかといえば学者肌といった一面をもつ慶一郎とは、却ってうまが合ったのかも知れない。

慶一郎は米英仏蘭の四国連合艦隊との交戦をはじめ、日本全国を敵にした四境戦争の小倉口の戦、一転官軍として幕軍を征討した北越戦争のいずれにも参戦しているが、勝之進もまた四境戦争の石州口の戦、鳥羽伏見の戦、北越戦争に引き続いて参戦している。

勝之進がつねに最前線にあって士卒を指揮し、北越戦争では中隊司令をつとめているのに対して、慶一郎はつねに砲台の築造や地雷の布設、前戦へ送る砲兵の訓練などに当たっていた。慶一郎と勝之進とは現実にはほとんど駆け違っていたが、互いにふつふつと滾るものを胸中に溢れさせながら、はげしく濃密な青春をとものに過ごしたという気持がひとときわ強く通い合っていたといえる。

維新ののち、慶一郎は民部省に、勝之進は兵部省にと、ともに新政府に出仕した。だが、陸軍中佐に進んでいた勝之進は、明治三年、前原一誠が官を辞して萩に帰郷した折り、その後を追って行をともした。

慶一郎もまた権大録——録は輔、丞に次ぐ階職であるが——に任ぜられながら、新たに設置された工部省への移管に際して中央政府に望みを失い、明治四年に官を辞して故郷の長府に帰った。

以来、慶一郎も勝之進も賞典禄や秩禄公債で食いつなぐという逼塞した暮らしを続けたわけであるが、そうした共通の環境のもとらす一種やる方ない思ひは、この二人の胸中に屈折しながらも、反面ではいよいよ深く通いあうものを生んでいくようであった。

勝之進は折り折りに送って寄こす慶一郎への手紙の中で、新政府の誰彼を痛烈に罵倒し、憤

薄をぶちまけてくることがあった。その文面に籠められている彼の見解に、慶一郎は必ずしも全面的に共鳴できたわけではない。どうかすると、ふと冷やかな気持すら抱いて、年来の友の文字を見ることもある。いったんは新政府に出仕しながら、ともに官を辞して帰郷した二人であつたが、慶一郎と勝之進の気持にはかなり陰翳の違うものがあつた。

勝之進は井上馨、山県有朋、とりわけ木戸孝允に対して反感を抱く様子で、慶一郎への手紙の端々にもそうした気持をあらわに示すことがあつたが、それはまた彼の私淑した同郷の先輩である前原一誠に殉じる気持のあらわれでもあつた。

一誠が官を辞した理由は、木戸一派との対立にあるといわれている。その対立は北越軍征討総督府参謀であつた前原一誠が、越後府判事となつた頃からにわかに尖鋭になつたものである。明治二年春、水害に苦しむ農民たちの要望を入れて、一誠は独断で新政府の発令した地租を半減する令を出した。中央政府はことさら儒教風の仁政を飾りたてるものとしてこれをとがめ、その責めを負つて一誠は越後府判事を辞任したのである。

けれども前原が最も不満としたのは、旧士族に対する処遇、とりわけ脱隊騒動に対する木戸孝允の非情酷烈ともいえる処置であつた。

倒幕の最後の戦である戊辰の役がおわつて郷里に引きあげた官軍の兵士の多くは、多年の労

苦に報いる論功もなく解散を命じられたが、木戸、山県、井上らが数千円の年金をとるといふ風に、おのれたちには厚い新政府の功臣たちの、かつての同志に対するこうした態度が不公平とも冷たいとも映り、彼らの不満をつのらせたのである。明治二年から三年にかけて、いわゆる脱隊騒動がおこった主たる理由がそこにあった。

帰還兵士によるこうした反政府の動きは、山口藩内の各地に見られたが、もと奇兵隊士大楽源太郎のように背後から煽動するものもあり、また地価の査定、それにもとづく地租の不満を主たる理由とする農民一揆とも重なって、しだいに激烈な暴動の様相を呈しはじめた。ついに遊撃隊、奇兵隊、整武隊など諸隊の兵士約千八百人が藩の武器を奪って起ち、山口藩庁を包囲するに至った。

だが、常備軍との二日にわたる死闘のちに脱隊兵たちは捕えられて、指導者三十六人が柙こゑ木の刑場で斬首されたのである。死体はそばの古井戸に投げこまれたという。酸鼻をきわめたその光景は、実際に見たものの口から故郷の町に次々と伝えられて、なまぐさい風のそよぐようにいまだに語り継がれている。

慶一郎も、帰郷してその折りの話を直接故郷の人の口からつぶさに聞かされたとき、なんともいいようのない気持に打たれた。暗澹とした味気ない思いをしたのも、まぎれもない事実であ

る。とはいえ、勝之進のいうように、前原一誠や勝之進たちの野に下った理由が、新政府の手前勝手で他には酷薄といったやり方に対する、いちずな怒りからだけという風にも思えなかった。勝之進が一誠に私淑するのは、にわかにはじまったことではない。だが北越戦争に際して、総督府参謀であつた一誠の下で中隊司令として身近に接し、さらに越後府判事としての一誠の態度に共鳴して、いよいよ一誠へ傾倒する気持を深めたものようであつた。

むろん慶一郎にも勝之進のそうした気持はよく分る。しかし、ならばそういう気持は例えば征韓論とどういうかわりがあるのか、なるほど信念のちがいという一面もあるであろうが、個々の理由はむしろひとつのきっかけであり政争の手段に過ぎず、所詮はただ一誠らが互いの権力闘争に破れたのであつて、すべてが功業欲の発現に過ぎないではないか、慶一郎にはそのように思われるのである。事実、一誠が官を辞して帰郷したのは、木戸孝允の一派である井上馨の策謀にうまくはめられたものという噂があつた。

前原一誠は佐世八十郎といった若い頃、吉田松陰の松下邸塾に学んで、久坂玄瑞、高杉晋作と並んで三羽鳥といわれた俊才であつた。彼はまた長崎で洋式兵術を学び、大村益次郎に次ぐその道の先覚者でもある。

明治政府の初代兵部大輔に登つた大村益次郎は、のちに久留米で殺されるまで攘夷思想を捨

てなかった大楽源太郎などにそそのかされたもと奇兵隊士に襲われ、その傷がもとで明治二年の九月に死去したが、そのあとを受けて、一誠は兵部大輔になった。彼はすでに参議に登っていたが、同じく参議になつてともに新政府に並ぶ大官同士であった木戸孝允は、そのとき強く一誠のこの赴任に反対した。一誠の兵部大輔就任は、却つて薩摩の西郷隆盛の推挙によつたものである。

慶一郎は、長州藩の兵制が討幕戦に備えて洋式に統一された慶応二年に、藩命によつて山口におもむき、当時まだ村田蔵六といったのちの大村益次郎から、四カ月にわたつて洋式兵術について学んだが、その折り前原一誠も来ていたから、いわば同門の弟子といえる。同じ系譜を継ぐものとして、この二人からは大いに学ぶところがあり、また慶一郎からもそれ以後何かと進言していた。

そうしたいきさつもあつて、前原一誠とは面識もあつたし、重厚誠実なその人柄には、慶一郎自身も少なからぬ敬愛の気持を抱いている。のみならず維新後の世界に漠然と抱いていた期待が音たてて崩れ去り、前途に輝いていたものが消え失せたといううそ寒い挫折感、慶一郎にも勝之進と通ずるものがあつた。

にもかかわらず、前原一誠をいちずに信じて傾倒する岩間勝之進に、慶一郎はふと憐れをも

よおすことすらある。時代がどのように変わっても、所詮変らぬのが人間の姿かも知れぬ、という思いが慶一郎にはつよい。中央にあって新政府に出仕した幾年かのあいだに、慶一郎が身をもつて教えられ、心に刻みこまれたなものかによるものであったかも知れない。過ぎてゆく年月とともに、慶一郎の心身に深く沁みこんでいるものがあつた。

二

慶一郎が思いがけず山口県令中野梧一の訪問を受けたのは、明治七年、佐賀の乱が鎮圧された直後のことである。中野は県令として新たに赴任したばかりであつたが、旧幕臣ながら慶一郎とはかねて旧知のあいだであつた。野にあるおのれをわざわざ訪ねてきてくれたことに慶一郎はさすがにほのかな喜びを覚え、恐縮して彼を座敷に招じ入れた。

中野は鄭重に久瀾を述べ、最近どうしていますか、元気ですか、などと慶一郎に訊いた。しばらく世間話が続き、話題は当然のことながら佐賀の乱のことに触れた。

西郷が動けば、前原も起つてでしょう。この二人を連繫させて盟主に仰ごうという動きがあるようです、と、中野は慶一郎に言うのである。新政府に不満を抱く旧藩士たちが、なおそれぞれの故郷にあって勢力を結集しているという噂がしきりとんでいる。

その前年、新政府内での覇権争いが征韓論をめぐるって決裂し、西郷隆盛は下野して鹿児島に帰り、江藤新平も参議を辞して郷里の佐賀へ帰った。

江藤は明治政府顛覆の夢を抱きながら、その年の二月に二千名の兵を集めて反乱をおこしている。だが、いったんは佐賀城を占領したものの五日目には形勢逆転して、政府軍の圧倒的勝利に終り、江藤新平、島義勇ら十二名の指導者は捕えられて斬首のうえ、その首は三日間梟されたのである。新政府の示威のためかその写真が全国に市販されており、薄く眼をつぶり、かすかに口を開けながら台上に梟されている江藤のその生首の写真を、慶一郎はつい数日前、眼にしたばかりであった。

中野はもの静かな口調のまま、かすかに両眼を細め、とりとめのない瞳で慶一郎を見据えるようにすると、

ときに青江さん、萩へいって、前原一誠の動静をさぐってきてくれませんか、と言うのである。

中野はなに気なく言ったようであったが、慶一郎は眼に見えぬ網のようなものが頭上にふわりと蔽いかぶさってきたようで、おのれの心がにわかに翳り冷えてゆくのを覚えた。

無言のまま慶一郎が中野の顔を見返すと、